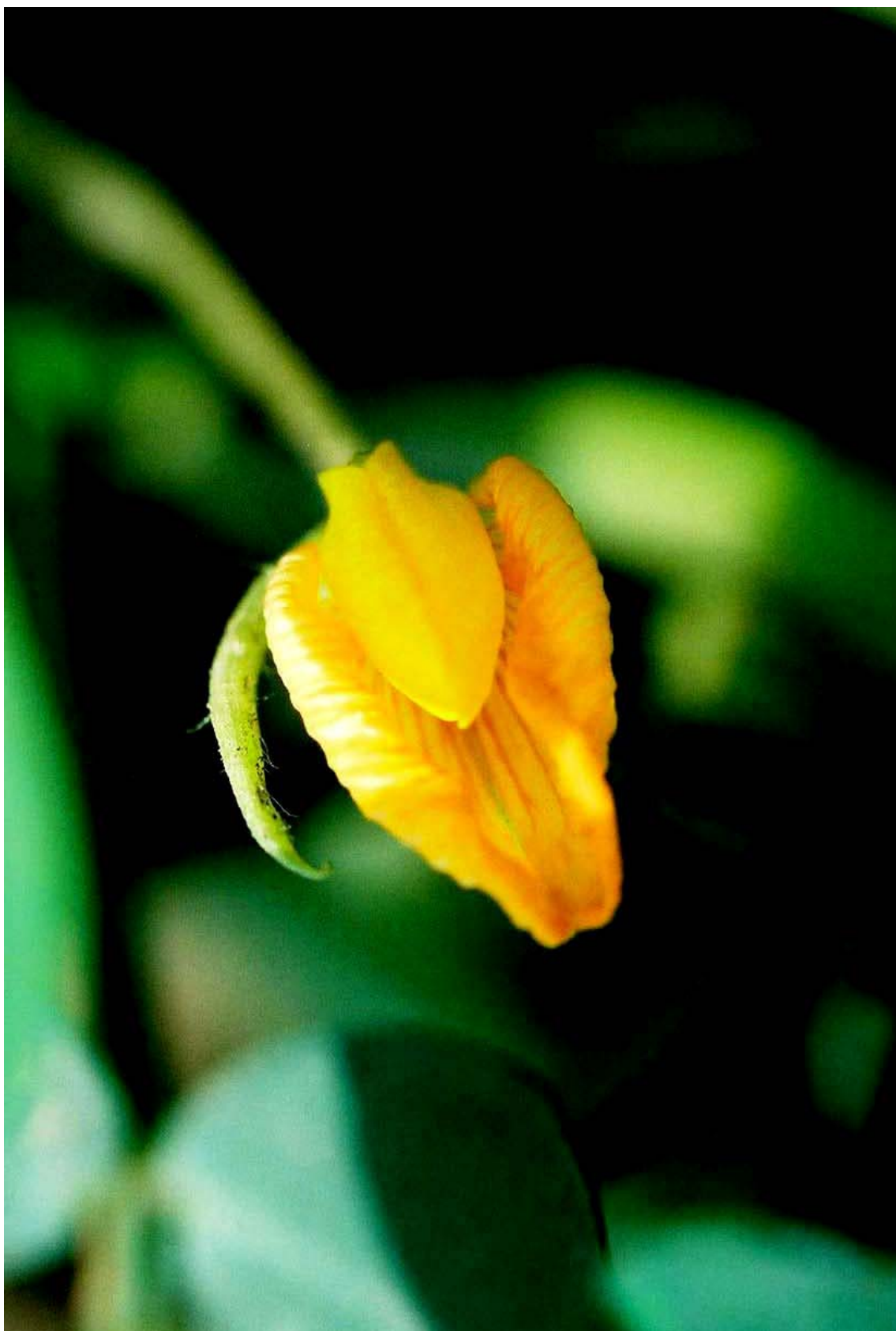


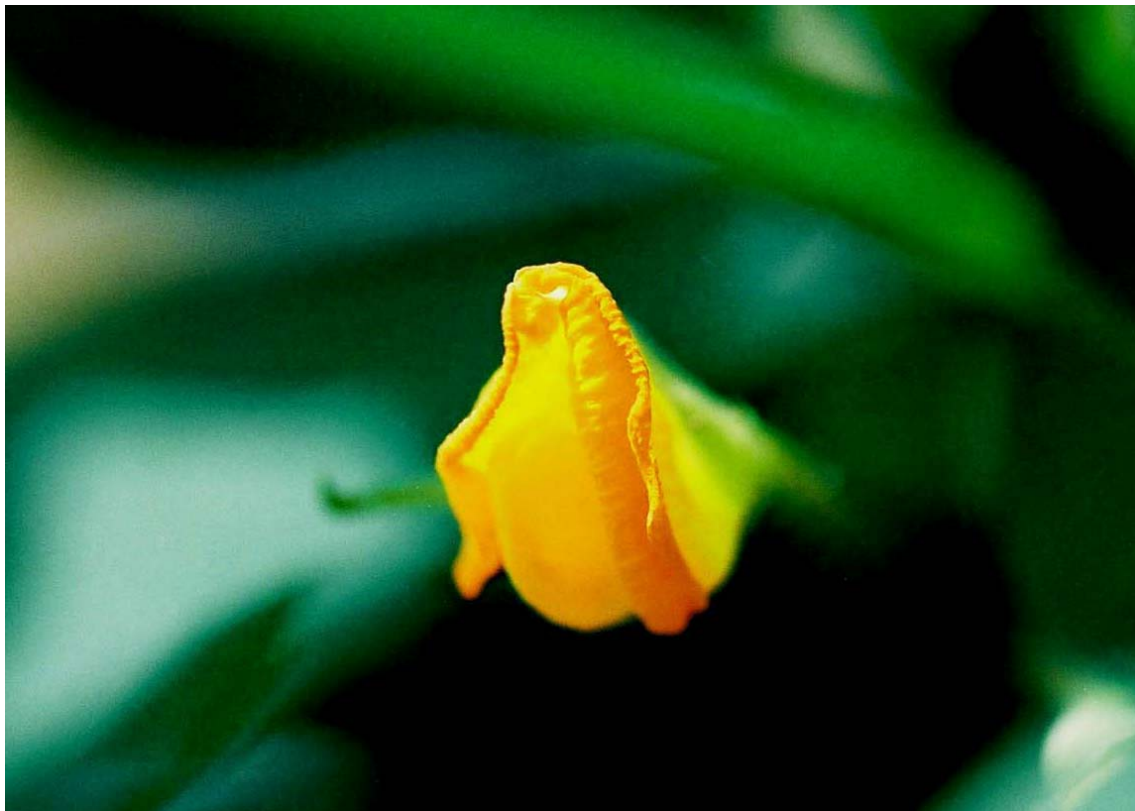
13) ラッカセイ＝落花生

ラッカセイはマメ科の一年草で、茎は基部からよく枝分かかれし、枝は地面を匍匐しながら伸びて、長さは1～1.5mに達する。葉は2対の4小葉からなる複葉で、暗いところでは対の小葉が合わさって閉じ、明るいところでは開いて、いわゆる睡眠運動をする性質がある。花は直径1cmほどのマメ科独特の蝶形で、夏の早朝、淡い黄色の花を葉腋に咲かせ、午後には萎れてしまう。自家受精で、開花後5日ほど経つと、子房(シボウ)と花托(カタク)との間の、子房柄(シボウヘイ)といわれる部分が伸びて、やがて子房は地中に潜り込み、子房の先端が地中数センチのところまで肥大して、莢(サヤ)を形成する。この不思議な生態が落花生の語源というわけで、さらに不思議なことには、茎の基部の地中部分にも地下花が着き、開花することなく自家受粉して、結実することもある。また莢の表面には網目状の凹凸があり、ここでも養分を吸収することができる。この莢は熟して乾燥すると、堅い殻となり長さ2～5cmほどで、通常、中には2個、品種によっては1～5個の種子がある。種子は長さ2～2.5cmで、紅褐色や橙黄色の薄い種皮に包まれている。原産地は南アメリカのボリビア南部、アンデスの東山麓あたりで、現在では寒冷地を除く温帯から熱帯地方まで広く栽培されている。和名の由来は中国名の音読みで、別称としてナンキンマメ(南京豆)、トウジンマメ(唐人豆)、イジンマメ(異人豆)、ツチマメ(土豆)、タワラマメ(俵豆)などさまざまである。学名は『*Arachis hypogaea*』で、属名は地中結実性のクローバーの1種『*arachiduo*』に由来し、種小辞は「地下の」という意味である。イギリスでの呼称は『peanut』『groundnut』『earthnut』などで、フランスでは『arachide』、中国では『落花生』である。

落花生は紀元前に中央アメリカに伝わり、中南米各地で食料として栽培されていたが、新大陸の発見と共に16世紀にはポルトガル人によってアフリカに伝えられ、スペイン人は食料として船に積み込みフィリピンに伝えた。西アフリカでは以前から地下結実性のバンバラビーンが栽培されていたために容易に定着し、17世紀になると落花生は奴隷の食料として、奴隷船に積まれてアメリカに伝わったばかりか、ギニアやセネガルなどアフリカ東部でも栽培されるようになった。同じ頃ヨーロッパにも伝えられ、中国にはペルーから直接伝播したが、日本には17世紀末の元禄時代に中国から入った。最初は長崎で栽培され中国風の料理に使われたらしい。18世紀初頭に記された『大和本草』には、長崎に多く植えられたことが記されている。また貝原好古はその著『和爾雅』(ワジガ)の中で「落花生」と記し、『増補地錦抄』には地中で結実することが記されている。水戸光圀の『桃源遺事』にも落花生導入の記述があり、この頃から日本でも栽培されるようになったと思われる。しかし食用として本格化したのは明治になってからのことである。現在、世界での生産高はマメ類ではダイズに次いで第2位。生産国はインド、中国、アメリカなどである。



開き始めたラッカセイの花、ラッカセイは不思議な生涯をおくる(千葉県東金市)。



マメ科の中でもラッカセイの花は、黄色が赤みを帯びてひととき美しい(千葉県東金市)。



大地から掘り出されたピーナッツ(埼玉県深谷市)。

[目次に戻る](#)